

小腸二重造影法の開発以来ほぼ10年が経過した。そして、いろいろな小腸の病変を美麗に描出した論文が数多くみられるようになった。その、現時点での集積が本特集号である。方法、手技など、各術者によって細かい工夫がなされ、小腸二重造影法は一応完成の域に達した感じすらある。

しかし、胃や大腸の二重造影法に比し疾病概念や病態の解明に資するといった面では、まだその成果に乏しいと感じるのは筆者のみであろうか？

消化管X線診断学の本質は、病理組織構築の積分である肉眼形態を微細かつ正確にX線検査にて描出し、逆にX線像からその病理組織構築を類推することにあると思う。本邦では欧米に比し小腸病変が少ないこと、小腸では解剖学的なハンディキャップや、外科的手術の適応とならない疾患が多いこと、など胃や大腸に比し労力を要する面が少なくない。しかし、あくまでも“診断学”としての目標は同じであるはずである。診断学として確立されるには精細で確実な症例の蓄積が必要で、そのためには、次代、次々代にまたがる努力以外にはないように思われる。そうして、そのときはじめて小腸二重造影法が従来の疾患概念を変えるような業績をもたらすと考えられる。

そのような意味では、小腸二重造影法は完成したのではなく、やっとそのいとぐちを見出したにすぎないと思う。今後一層の精進が必要であろう。

<八尾 恒良>

<編 集> 早 期 胃 癌 研 究 会